

---

# 光は舞う

朝霧弥生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光は舞う

### 【Nコード】

N4882D

### 【作者名】

朝霧弥生

### 【あらすじ】

「……言っている意味が分らん。お前は何がしたいんだ?」「この男……、私の目の前に丁寧に姿勢をくずさず座っているこいつは何が言いたい?いきなり私を自分の自室へ呼び出して、いつも勝手に動いているくせにしてどうして私の意見を聞こうとするのか。」

## 「話「恐れる心」

「……言っている意味が分からん。お前は何がしたいんだ？」

この男……、私の目の前に丁寧に姿勢をくずさずに座っているこいつは何が言いたい？

いきなり私を自分の自室へ呼び出して、いつも勝手に動いているくせにしてどうして私の意見を聞こうとするというのか。

こいつはいつも身勝手だ。

人の意見などろくに聞こうとしない。なのにどうして非戦闘員である私に尋ねる？こんな無駄なことをするくらいなら、幹部に聞けばいいというのに。

「言っただ通りだ。それ以外に何か言っただか」

声にまったく感情がこもっていない、淡々とした声で嫌な瞳で私の瞳に合わせながら言う。こうやって、人の精神状態を乱す、嫌なやり方だ。

こいつのやりたい事は大筋分かっている。こいつらしい、人道を外れた冷酷で残酷な事を表情一つ変えずに言いやがった。

こいつと一緒にいて、気分を悪くしない時なんて一度もない。普段は大人しい私は、この男の前だと感情が制御できなくなる。

「私が聞きたいのはそういう事じゃない。何故戦力外の私に問うのだと聞いている」

かすかに、こいつの顔に笑みが浮かぶ。こいつは何かを考えて笑っているのだろうが、私にはこいつの意図がまったく読めない。

「いいではないか。お前だってその病が完治すれば私をものぐ強力な戦力になるだろう」

「病が完治したら……。だが、この病は不死の病だどんな名医でも治せんだろう」

体の自由を蝕む、不死の病。私の一日ほとんどをこの病が蝕んでいる。

だが、私はこの病に感謝しているくらいだった。

この病が完治してしまえば、こいつの仕事を手伝わなくてはならない。

だが、この病が治らない限り事務仕事だけですむのだ。まあ、このままいけばあとわずかの命しかないのだが。

「そうか？ 異界に何でも治せる、術者がいると聞くが」

「強制的に連れてくるつもりか……」

「お前が治せるならば安いものだろう？それともお前は死にたいのか」

私は殺気立っていた。

こいつはこうやって人の自由を奪っていく。自由は、命なんかより大切なものだということを全然分かっていないのだ。

自由があれば、命も輝いて見える。自由があるからこそ、人は生き  
ることを誇りに思い楽しむのだ。

だがこいつは、命は奪う自由は奪う。

私もこいつに自由を奪われた人間の一人だ。

「ああ……お前に屈するくらいなら自分の手で死ぬわ。      気分が  
悪い。帰るぞ」

そう、私は言うのと立ち上がり襖のつてに手をかける。  
このままここにいるだけでは、精神が乱れてこいつの思う通りにな  
るだけだろう。

「      怖いのか？」

静かな声が、私の耳を刺激する。私は何も言葉を発することの出来ぬまま、立ち止まってしまう。

「怖いのか。清紀よ」

「怖く……など……」

怖くなどない。今更、こいつは何を言うか。

だが、鼓動の音は早まるばかりだった。

「また剣を握り人を殺めるのに恐れるのか！清紀！」

殺気でもなく、怒りでもない刀より鋭い言葉。

「お前にだけは言われてくないッ！お前などただの殺人快楽者ではないか！」

そう言うとは私はその部屋を足早に出て行った。後ろからは、何も聞こえない。  
呼び止める声は、ない。

あいつはまたこの私に剣を握れというのか。

人を殺めることに恐怖を抱いている私が剣を握ってももろい刃になるだけだ。私はあいつとは違う、あいつのように氷の刃をもっていない。

戦いに必要なのはあいつのような無感情な心。

あいつの言ったことは正論だった。

俺はただ恐れているだけなのだ。

## 「話「打ち明け」

「兄貴？」

親友である、尾上啓輔の間抜けおがみけいすけた声。

俺たちは学校の帰り道、いつも一緒に帰る。啓輔とは中学のころからの親友で、部活や勉強、休日も共にするほど仲がいい。

あまりに俺たちがいつもくっついてるので、学校の一部ではホモだということなんとも迷惑な噂が流れている。

こんなの誤報だ。

俺たちはただ仲がいいだけで、そんな関係はない。こいつとは腐れ縁で心から信用できる友達なのだ。

啓輔は俺と同じ剣道部に入部している高校一年で成績はまあまあだが、部活動においてはかなりの成績をおさめている。活発そうな、顔つきに短く乱雑に切られた髪。

今時の高校生にはめずらしく髪も染めていないし携帯も持たない。清潔第一の少年だ。

「お前には話そうと思って」

「ちょ……お前って一人っ子だったんじゃないのかよ？」



突然俺の口から出された言葉、啓輔は理解できていないみたいだった。  
それかもしれない。

「んー……いや、俺が十歳くらいまで兄貴がいたんだよ」

「でもお前はそんなこと……」

啓輔は俺の家に何回も来たことがあるし、俺の祖父母の家にも訪ねたことがある。俺の家のことはだいたい知っていたし、俺も啓輔のことはだいたい知っている。

しかし、すべては話していない。

前々から話そうと思っていたが中々話せるチャンスがなかった。

「そりゃそうだな……話していないからな」

何で、と問われれば回答に困るだろう。確かにいいチャンスはなかった。

だが話そうと思えばいくらでも話せた。

なぜか話す気になれなかったのだ。

ここまで信用している啓輔にさえ話せなかった理由……。

そんな俺の複雑な心情を読み取ったのか、啓輔の口調がさっきより優しくなる。

そこまで強く追求しない。

これも俺たちのルールだった。

「しかし、驚きだよなー。お前に兄貴がいたなんて」

「ははは……ごめんなー。いつか話そうと思ったんだけど」

「いやいって。でもさー見かけたことないな。仕事でもしてんの？」

この際だ。

話しておくのもいいだろう。

このまま適当に答えておけば啓輔も信じるだろう、だが啓輔には嘘をつきたくなかったし、どうしてか話したかった。

「あの……さ……うちの兄貴、行方不明なんだよな」

少し、間が空いた。

予想通りの反応だ。それ以上の反応を期待していなかったし、それ以下の反応も期待していなかった。

「え……何？家出？」

「いや、家出じゃねえよ。家には財布も衣服もすべて残されていた。それに兄貴は家に不満をもつような人じゃなかった。おそろく……」

今、考えるだけで胸が引き締められる。

俺がまだ十歳で経験した、絶望に近い感情。今でも消えない。

「何か事件に巻き込まれたんだ」

よみがえる、あの記憶。

忘れてはいけない、あの瞳。

「どういう……意味だ……？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4882d/>

---

光は舞う

2010年10月9日07時21分発行